

はもんふうもん  
**波聞風問**



編集委員

よしか けいこ  
吉岡 桂子

中国企業訪日団

新しい友達探しにきました

中国の大手企業10社のトップが9月下旬、ビジネスジェットに乗り合わせて東京にやってきた。尖閣諸島をめぐる対立が解けないなか、企業どうしの交流を深め、関係の改善を探る動きといえる。

メンバーは有力者ぞろいだ。訪日団を率いた中国最大の国有複合企業、中信集団(CITIC)の常振明会長は、中国共産党8500万人のうち2千人余りしかいない党代表。世界最大級の国家ファンド・中国投資(CIC)の高西慶社長は、日本の国会にあたる全国人民代表大会の代表のひとりだ。

習近平政権が彼らの集団での訪日を認めたのは、経済は「島」の問題と切り離し、正常軌道に戻したい思いがあるからだろう。日本の各都市が中国人観光客の激減に悩むように、中国の地方都市も日本企業からの投資が減って困っている。日本政府にとっても「渡りに船」。菅義偉・官房長官が歓迎し、福田康夫・元首相も面会した。

常さんは、北京第二外国语学院大日本語学科卒。中国企業の大

大手トップには珍しい「知日派」だ。それだけに「反日分子」から感情的な批判を浴びかねない。「気になりませんか」。私の問いに直接は答えず、こんな話をしてくれた。

CITICは1979年、改革開放に踏み切った中国が海外からお金や技術、先進的な設備を導入しようとしてつくれた。最初の合弁は、日本の地下足袋会社・力王だった。80年代初めに最初に海外で発行した債券は円建てのサムライ債で、市場は東京だった。今回の訪日は「新しい友達

を探しにきました」と常さん。欧米からカザフスタンまで、企業の対話の場をもつ。互いに重要な貿易、投資先で、世界第二と第三の経済大国である中国と日本がそっぽを向くのは不自然だ、と。

5日間の訪日の一部始終を、中国版ツイッター、ウェイボーでつぶやいていたトップもいる。大手不動産会社、華遠地産会長の任志強さんだ。率直な物言いが人気で、フォロワーは1546万人もいる。「打倒小日本」と攻撃的な声もあったが、少数派

だ。任さんが流す写真に「東京の空は中国より透明度が高い」「会談の場に花も果物かごもない。簡素さは学ぶべきだ」。興味津々で見ている。

北京に戻った任さんは、ころもつぶやいた。「大多数の日本人は中国人を憎悪してないよ」。同意するかきこみが続く。「私も4月に旅行したけれど、そう思った」

訪日団と意見交換した経済同友会代表幹事の長谷川閑史・武田薬品工業社長は「非常に有意義だった」と今後も話し合いを続ける考えだ。

企業や民間レベルでの交流は、政治の対立を薄めることはできる。そんなことを思い起こさせる訪日団だった。